

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編（2022年改訂版）

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

哺乳類

前回評価（2012年）	今回の評価（2022年）								計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧 I A類	絶滅危惧 I B類	絶滅危惧 II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
野生絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I 類（区分なし）	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I A類	0	0	0	0	0	1	0	2	3
絶滅危惧 I B類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 II類	0	0	0	0	1	0	0	0	1
準絶滅危惧	0	0	0	0	1	4	2	2	9
情報不足	0	0	0	0	1	3	3	6	13
掲載なし	0	0	0	0	0	0	1	0	1
計	0	0	0	0	3	8	6	10	27

前回は、絶滅危惧 I A類3種、絶滅危惧 II類1種、準絶滅危惧9種、情報不足13種の26種を掲載していたが、今回は、絶滅危惧 II類3種、準絶滅危惧8種、情報不足6種の17種の掲載となった。前回の課題だった調査充実化を進めた結果、県下における生息状況がある程度明らかになった種も多く、とくに情報不足の種数が減少した。

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 (2022年改訂版)

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

鳥類

前回評価 (2012年)	今回の評価 (2022年)								計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧 I A類	絶滅危惧 I B類	絶滅危惧 II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
野生絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I 類 (区分なし)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I A類	0	0	3	0	0	0	0	0	3
絶滅危惧 I B類	0	0	3	9	0	0	0	0	12
絶滅危惧 II類	0	0	0	2	3	0	0	0	5
準絶滅危惧	0	0	0	1	5	7	0	1	14
情報不足	0	0	2	3	4	16	15	12	52
掲載なし	0	0	0	0	1	7	2	0	10
計	0	0	8	15	13	30	17	13	96

前回の掲載種86種のうち準絶滅危惧から1種、情報不足から12種がリストから除外され、新たに10種が加わり、合計種数は86種から83種になった。合計種数が減少したり、リストから除外されたりした種があるものの、除外された13種以外では前回と同じ評価が37種、前より上位のランクに評価された種が36種、新たにリストに加わった種が10種で、全体としては絶滅のおそれが低減している訳ではない。

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編（2022年改訂版）

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

爬虫類

前回評価（2012年）	今回の評価（2022年）								計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧 I A類	絶滅危惧 I B類	絶滅危惧 II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
野生絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I 類（区分なし）	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I A類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I B類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 II 類	0	0	1	0	0	1	0	0	2
準絶滅危惧	0	0	0	0	0	2	0	1	3
情報不足	0	0	0	0	0	0	1	0	1
掲載なし	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	1	0	0	3	1	1	6

ニホンイシガメは、非常に生息数が少ないと判断されたため、絶滅危惧 II 類から絶滅危惧 I A類に評価を変更した。ニホンヤモリは新たな分布地点の確認や、個体数の増加等が見られた地域があったため、絶滅危惧 II 類から準絶滅危惧に変更した。県内のクサガメは外来種である可能性が極めて高いため、準絶滅危惧から掲載なしに変更した。タカチホヘビ、シロマダラは準絶滅危惧、ニホンスッポンは情報不足でそれぞれ変更なしとした。

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編（2022年改訂版）

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

両生類

前回評価（2012年）	今回の評価（2022年）								計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧 I A類	絶滅危惧 I B類	絶滅危惧 II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
野生絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I 類（区分なし）	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I A類	0	0	1	0	0	0	0	0	1
絶滅危惧 I B類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 II類	0	0	0	0	5	0	0	0	5
準絶滅危惧	0	0	0	0	0	2	0	0	2
情報不足	0	0	0	0	0	2	0	0	2
掲載なし	0	0	0	0	0	2	0	0	2
計	0	0	1	0	5	6	0	0	12

群馬県では今回12種を選定した。内容は、前回情報不足とした2種と、前々回（2002年版）で注目だった2種ともに生息条件の変化の傾向もあり、現時点での危険度は小さいと考えられるが、準絶滅危惧に評価した。

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 (2022年改訂版)

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

魚類

前回評価 (2012年)	今回の評価 (2022年)								計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧 I A類	絶滅危惧 I B類	絶滅危惧 II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
絶滅	7	0	0	0	0	0	0	0	7
野生絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I 類 (区分なし)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I A類	0	1	2	0	0	0	0	0	3
絶滅危惧 I B類	0	0	0	1	0	0	0	0	1
絶滅危惧 II類	0	0	0	1	4	0	0	0	5
準絶滅危惧	0	0	0	1	0	5	0	0	6
情報不足	0	0	0	0	0	0	4	0	4
掲載なし	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	7	1	2	3	4	5	4	0	26

今回絶滅と評価されたワカサギは城沼など、本来生息した平野部の湖沼で確認されるようになったが、これは他地域の個体を移殖したもので在来の個体群とは異なる。前回絶滅危惧 I A類と評価された3種のうち、ヤリタナゴは本来の生息地が圃場整備事業で失われ、移殖地のみの生息となったため、野生絶滅と判断した。前回絶滅危惧 II類と評価したホトケドジョウを絶滅危惧 I B類、前回準絶滅危惧と評価したサケを絶滅危惧 I B類と評価した。情報不足の種はこの10年間で新たな情報は乏しい。

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 (2022年改訂版)

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

昆虫類

前回評価 (2012年)	今回の評価 (2022年)								計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧 I A類	絶滅危惧 I B類	絶滅危惧 II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
絶滅	1	0	0	0	0	0	0	0	1
野生絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I 類 (区分なし)	4	0	15	13	3	0	1	2	38
絶滅危惧 I A類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I B類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 II類	0	0	1	2	47	2	0	1	53
準絶滅危惧	0	0	0	3	1	72	4	3	83
情報不足	2	0	3	1	15	37	61	6	125
掲載なし	0	0	0	3	6	18	11	0	38
計	7	0	19	22	72	129	77	12	338

前回は1種であった絶滅種が50年以上記録ないため絶滅と判断され、絶滅種が7種となった。絶滅危惧 I A類と絶滅危惧 I B類は前回(絶滅危惧 I 類)の38種から41種と3種増え、絶滅危惧 II類については前回の53種から72種と大幅に増加しており、昆虫類の生息は10年前より厳しい状況になっていることが示唆された。なお、情報不足は前回の125種から77種に減少するとともに12種が評価対象から外されたが、これは調査の進展によるものと考えられる。

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編（2022年改訂版）

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

クモ類

前回評価（2012年）	今回の評価（2022年）								計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧 I A類	絶滅危惧 I B類	絶滅危惧 II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
野生絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I 類（区分なし）	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I A類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I B類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 II 類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
準絶滅危惧	0	0	0	0	0	4	0	0	4
情報不足	0	0	0	0	0	0	6	0	6
掲載なし	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	4	6	0	10

今回選定された掲載種は過去10年間における調査結果を踏まえ前回の掲載種を再評価した結果である。環境省のレッドリストに掲載されているクモ類が過去20年間、ほぼ同じ17種で推移しているのは定量的な評価が困難なためである。特にクモは常に同じ場所に毎年生息するとは限らないため、個体数の増減判定や生息場所の特定が困難である。また、自身の生ずる糸を利用して空を飛び、移動能力があるため（一部は移動力の弱い種もあるが）、個体数の少ない種であれば、生息地の特定も困難となる。掲載種は、今後も調査を継続して行い、データを積み上げていく必要がある

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 (2022年改訂版)

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

甲殻類

前回評価 (2012年)	今回の評価 (2022年)								計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧 I A類	絶滅危惧 I B類	絶滅危惧 II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
野生絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I 類 (区分なし)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I A類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I B類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 II類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
準絶滅危惧	0	0	0	0	1	2	0	1	4
情報不足	0	0	0	0	1	0	0	0	1
掲載なし	0	0	0	0	0	1	0	0	1
計	0	0	0	0	2	3	0	1	6

前回準絶滅危惧と評価したアジアカブトエビは豊田 (2019) によって外来種とされたのでリストから除外した。ヌカエビは減少著しく、モクズガニは河川横断工作物 (堰) によって遡上障害が利根川流域で発生し、減少が明らかなので情報不足から絶滅危惧 II 類とした。また、サワガニは農地開発や農薬の流入により局所的に減少し、低標高地では家庭排水などによっても減少が顕著なので準絶滅危惧とした。



群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編 (2022年改訂版)

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

陸・淡水産貝類の結果

前回評価 (2012年)	今回の評価 (2022年)								計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧 I A類	絶滅危惧 I B類	絶滅危惧 II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
絶滅	1	0	0	0	0	0	0	0	1
野生絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I 類 (区分なし)	0	0	10	13	0	0	0	1	24
絶滅危惧 I A類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I B類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 II 類	0	0	0	0	15	0	0	0	15
準絶滅危惧	0	0	0	0	1	9	0	0	10
情報不足	0	0	0	0	1	1	3	0	5
掲載なし	0	0	0	0	0	4	6	0	10
計	1	0	10	13	17	14	9	1	65

絶滅危惧 I A類と絶滅危惧 I B類は、前回 (絶滅危惧I類) より1種減って23種となったが、これらの種の中には20年以上引き続き生息不明で絶滅とは断定できないが、絶滅した可能性が高い種も多く含まれる。また陸産貝類の1種は、新たな生息地に個体数も多く確認できたため今回評価対象外とした。絶滅危惧 II 類は、前は情報不足と準絶滅危惧種であった2種が加わった。また準絶滅危惧種は、未掲載の陸産貝類4種が新しく加わった。生息環境の悪化が続いており、評価対象は依然として増加している。

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編（2022年改訂版）

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

ヒドロムシ類・ウズムシ類

前回評価（2012年）	今回の評価（2022年）								計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧 I A類	絶滅危惧 I B類	絶滅危惧 II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
野生絶滅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I 類（区分なし）	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I A類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 I B類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
絶滅危惧 II 類	0	0	0	0	2	0	0	2	4
準絶滅危惧	0	0	0	0	0	1	0	0	1
情報不足	0	0	0	0	0	0	0	0	0
掲載なし	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	2	1	0	2	5

今回絶滅危惧II類と評価した2種は、前回も絶滅危惧II類と評価した種である。これらの種は現存する分布地が限られ、生息環境の悪化が懸念されるなど絶滅する危険性が高まっている。なお、前回は掲載されていたが今回は評価対象外とし掲載していない2種はいずれもコケムシ類である。絶滅のおそれがあるのか否かを判断できる記録や情報が得られなかったため評価対象外としたもので、生息環境の改善や個体数の増加により絶滅のおそれが無くなったわけではない。